

訓点資料としてみた「長恨歌伝」の学習に関する一考察

—『源氏物語』への影響を通して—

渡辺 さゆり

一、平安文学への中国文学の影響

平安時代の貴族階級における「学習」を考察する際、上代から続く学令で定められた漢籍の学習の他に、平安時代に新たに興隆することとなった個人的家庭教育の場における「学習」を無視することはできないであろう。大学寮で学ばれていた教科が、その時代の要求する所との間に差が生じることによつて教育的意義が薄れ衰微していった一方で、政治的権力を握り勢力を増し、且つ経済的にも豊かな位置に付くこととなった貴族—藤原氏—は、その子弟を大学に入れることなく、時の学者を家司として招き、皇族と同じような形で個人的家庭教育を行うようになったのである。^{*1}このような個人的家庭教育の場では、律令制度と離れた自由な学習環境が整うこととなった。さらに

訓点資料としてみた「長恨歌伝」の学習に関する一考察—『源氏物語』への影響を通して—

この時代は、万葉仮名を簡略化し形成された平仮名の固定化が進み、前時代に比べ文字を使用する階層が増加した時代でもある。このような背景が相俟って多くの仮名文学が生まれることとなった。

このように日本仮名文学は生成発展したが、上代から引き続き形で行われた漢籍学習の影響、つまり日本文学に与えた中国の影響は切り離せない大きな問題である。^{*2}日本は古来、政治や行政、宗教、文字に至る様々な分野で中国の影響を受けながら、健全な創造精神及び批判的精神をもって日本に溶け込む新しい文化を構築してきた。^{*3}平安時代の仮名文学興隆期においても、中国の影響を蔑ろにすることはできないであろう。

金子（一九四三）ではこのような日本における外国文化（主に中国）の摂取の方法として三種類のパターンが考えられるとしている。第一に、翻訳によらず原語のままの形で中国の文字を読み、その影響を受容する方法、第二に、中国語の知識がなく、日本語による紹介や翻訳などによって、中国文学に触れる方法、第三に、いわゆる返点や送り仮名と称する訓点を施して、これを日本語として読む訓読を媒介とする方法である。築島（一九六三）では、第三の方法に関し、仮名文学と漢文訓読との関係について具体的な考察を加えている。^{*4}

二、訓点資料としての「長恨歌」と「長恨歌伝」

日本の平安貴族に大きな影響を与えた中国文学の一つに『白氏文集』がある。『白氏文集』は白居易の在世中に日本に伝わり『文選』等と並んで貴族間に詩文の模範として推重された。大学教科として採用されたテキストではないが、自由な個人的家庭教育の場における学習テキストとして、純文学的な『白氏文集』は貴族たちに愛好され

ていたのである。貴族の家庭教育は国家の教化意識の束縛をあまり受けなかつたため、教科書は自由な採扱が行われ、当時の文化の爛熟に伴い文学的なものが広く受け入れられた自由な風潮を示すこととなる。^{*5}

『白氏文集』が学習対象として愛好された結果、漢字文献である『白氏文集』には、日本語として読み下す際に必要なヲコト点や仮名点、その他防備的なメモ書きなどの書き入れが、行間や欄外に書き込まれることとなった。

このような訓点書き込まれた資料、つまり訓点資料は、日本語史上、大変貴重な資料であり、現存する旧鈔本『白氏文集』も訓点資料として大きな役割を果たしている。尚、旧鈔本『白氏文集』は、院政・鎌倉時代の奥書を有するものが二十点以上になるが、そのほとんどは卷第三・卷第四の「新樂府」である。^{*6}

旧鈔本『白氏文集』の中で、現在大東急記念文庫に蔵されている『白氏文集』は全二十一卷存し、すべて旧金沢文庫蔵本（以下、大東急記念文庫本とする）である。本文には豊原奉重による多くの書き入れが存する訓点資料であるが、この中の卷十二に「長恨歌」が収められている。^{*7}

大東急記念文庫本では「長恨歌」は散文である「長恨歌伝」^{*8}に続く形で掲載されている。また大東急記念文庫本卷十二はその奥書から会昌四年（八四四）に惠尊が蘇州南禅院に於いて書写したものの或いは重鈔本を底本とする卷に該当し、白氏原本に近い卷と考えられている。^{*9}したがって「長恨歌」の前に「長恨歌伝」が位置付けられていることは、白居易自身の意思によるものと考えられる。

尚、訓点資料として現存する旧鈔本『白氏文集』は他に、ノートルダム清心女子大学正宗敦夫文庫蔵「長恨歌」正安二年（一三〇〇）書写本（以下、正宗文庫本^{*10}）が存する。正宗文庫本は「長恨歌伝」「長恨歌序」「長恨歌」が収められている訓点資料である。^{*11}

三、「長恨歌」の『源氏物語』への影響―先行研究より

玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた「長恨歌」は、中国のみならず日本においても非常に愛好された作品の一つである。日本でもその影響は早くから認められ、弘仁九年（八一八）成立の『文華秀麗集』巻中の巨勢識人作「奉和春閨情愁」において、既に「長恨歌」の影響が見られるとされている。^{*12} 漢詩にとどまらず、『源氏物語』などの平安仮名文学にまで影響を与えたことは周知の事実である。

藤井（一九九四）によると、「長恨歌」は楊貴妃が殺されるまでの前部、玄宗皇帝の悲しみを描く中部、玄宗皇帝が方士に死んだ楊貴妃の魂のありかを尋ねさせる後部の三パーツにわけられるが、全体の三分の一を費やす後部が重要なところ、つまり何らかの鎮魂的意図を込めて書かれたのではないかとしている。したがって「長恨歌」が日本における仮名文学へ与えた影響を考える場合、物語内部の鎮魂要素として使われるという顕著な傾向を指摘でき、この傾向は『源氏物語』に深く関わることになるとしている。以下、藤井（一九九四）から「長恨歌」の影響を受けた『源氏物語』本文の例について引用する。

まず第一は、帝と桐壺更衣の愛と死別の悲哀を玄宗と楊貴妃に擬えて描いている桐壺巻で、帝が宇多天皇が書かせた長恨歌屏風の絵を見ながら、更衣と生前交わした「比翼鳥」「連理枝」の誓いを思い起こしている場面である。

（「長恨歌」からの引用箇所を傍線で示す。）

(1) 亡き人の住みか尋ね出でたりけむしるしの髪ざしならましかば、と思ほすもいとかひなし。

尋ねゆくまほろしもがなつてにても玉のありかをそこと知るべく

絵にかける楊貴妃のかたちは、いみじき絵師といへども、筆限り有ければ、いとにほひ少なし。大液芙蓉、未央柳もげに通ひたりしかたちを、唐めいたるよそひはうるはしうこそ有けめ、なつかしうらうたげ成しをおほし出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、翼をならべ枝をかはさんと契らせ給ひしに、かなはざりける命の程ぞ尽きせずうらめしき。(桐壺一六〇一七)

この様に桐壺更衣鎮魂のシーンに「長恨歌」の引用が見られるが、その場面が終わると「長恨歌」の引用は見られず、新たな物語の展開が見られるのである。

次に葵巻に見られる「長恨歌」の引用も桐壺巻と同じ手法であるとしている。葵上を物語の舞台から丁寧に送り出す鎮魂のシーンに「長恨歌」が引用されている。

(2) 御丁の前に御硯などうち散らして、手習捨て給へるを取りて、目をおし、ほりつ、見給を、若き人々は、かなしき中にもほをゑむあるべし。あはれなるふる事ども、唐のも大和のも書きけがしつ、草にも真名にも、さまざまぐめづらしきさまに書きませ給へり。「かしの御手や」と空を仰ぎてながめ給。よそ人に見たてまつりなさむがおしきなるべし。「旧き枕故き衾、たれとともにか」とある所に、
なき玉ぞいとかなしき寝し床のあくがれがたき心ならひに

又、「霜の花白し」とある所に、

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらん（葵三二五―三二六）

さらに幻卷に同じ手法がある。紫上鎮魂の意味合いの大きい卷であるから充分に考えられる手法であるとする。

(3) 蛍のいと多う飛びかふも、「夕殿に蛍飛んで」と、例の古言もかゝる筋にのみ口馴れたまへり。

夜を知る蛍を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもし給はで、つれづれにながめ暮らしたまひて、星逢見る人もなし。（幻二〇一―二〇二）

以上のように、桐壺卷、葵卷、幻卷に同一とも言える手法が「長恨歌」をめぐる見られるが、それは鎮魂によって女主人公を送り出し、そして場面は急速にあとの場面へと進行するにあたって「長恨歌」を利用するという手法である。

四、『源氏物語』と訓点資料

「長恨歌」が『源氏物語』に与えた影響は前述した如くであるが、築島（一九六三）では、漢籍が当時実際に読

まれた形、即ちその訓読語を検討し、『源氏物語』の本文と言語の形の上での関連を比較検討している。^{*13}

この中で、『源氏物語』に引用された漢籍として『史記』と『白氏文集』の二書が指摘されている。『史記』は紀伝道の中で最も重要な典籍の一つで、当時行われていた訓法は博士家に伝えられたものであり、紫式部もこれらの訓点本にある言語によって訓読し、その思想が取り入れられたと考えられるとしている。また『白氏文集』も同様に、当時訓読された訓点本の如く訓読し、それによって『白氏文集』の思想が『源氏物語』に取り入れられたであろうとしている。ただし『源氏物語』へは、読み下した日本語の一形式として仮名文の形で作品の中に取り入れられており、その表記の形式は、原漢文とは異なったものである。

築島（一九六三）では漢籍が当時、訓点本によって訓読されていたことを踏まえ、『源氏物語』と漢文訓読との関係について、a 漢文訓読語をそのまま引用したもの、b 漢文訓読語を当時の日常会話語に言い和らげて引用したもの、c 殊に特定の漢文の文献に典故を持つわけではないが、当時の訓読に常用されていた特殊な語彙や語法が種々の事情の下に混用されているもの、の三類があるとす。これらの具体例のうち、「長恨歌」と関連付けられる箇所を以下に示す。(4)がaの例、(5)・(6)がbの例で、cの例は「長恨歌」では該当する箇所がない。

尚、大東急記念文庫本と正宗文庫本の二本について該当箇所を翻刻し、掲げることとする。

(4) ① 夕—殿_に 螢 飛_て 思、悄—然_{たり}、秋 燈、桃_{カケ}—盡_マ 未_レ能_レ眠_{こと}。
(大東急記念文庫本卷十二286行)

② 夕—殿_に 螢 飛_て 思 悄—然_{たり} 秋 燈 挑_マ—盡_マ 未 能 眠_{こと}。
(正宗文庫本長恨歌34行)

(5) ① 鴛鴦瓦ヒヤカニテ 冷霜花重、舊枕、故衾、誰与共。
 (大東急記念文庫本卷十二287行)

② 鴛鴦瓦 冷霜華重 舊枕 故衾 誰与共
 (正宗文庫本長恨歌36行)

(6) ① 在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝。
 (大東急記念文庫本卷十二304行)

② 在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝
 (正宗文庫本長恨歌59行)

築島(一九六三)によると、(4)の例は、『源氏物語』幻巻に「夕殿に螢飛んで」とある。バ行四段動詞である「飛ぶ」の連用形が助詞「て」に連なって撥音便化する例は、源氏物語では他に存在しないと考えられ、訓読語がそのまま引用された例と考えられるとする。

(5)の例は、『源氏物語』葵巻に「ふるき枕ふるき衾たれとともにかせむ」とある。「共」は「トモニカセム」と訓読し、「ニカ」で中断する訓点は平安時代には見出されない。「にか」で省力終止するのは仮名物語類に見られる例である。つまり、引用された部分は訓読語のままであるが、恐らく「セム」を省略して和文的な表現にした例と考えられるとする。^{*15}

(6)は、『源氏物語』桐壺巻に「朝夕の言種に、翼をならべ、枝をかはさんと契らせ給ひしに、」とある。^{*16} 訓点本では「比翼」「連理」と字音で読んでおり、「はねのごとく」「えだをかはす」と和訓は用いなかった。特に「カハス」

は和文脈の特有語であり訓点には用いられなかったとされる。従って、原点の典拠のままではなく、和文脈的に言い換えたものと推測されるとしている。

小林（一九九四）によると、正宗文庫本「長恨歌」正安二年点は『源氏物語』成立後約三百年後の加点であるが、『源氏物語』の誦詠に引かれた『白氏文集』の訓読と一致しており、これは『白氏文集』の訓読が少なくとも『源氏物語』の頃には固定しており、その固定した訓読に基づいて加点されたことの反映であるとしている。また、正宗文庫本はその奥書から菅原家の証本に拠ったものであることが明らかであるが、『源氏物語』に引かれた誦詠も菅原家の訓読を引いたものであることが明らかとなっており、従って両者は完全に一致して何ら問題はないとしている。紫式部の父為時は、文章博士菅原文時の高弟であったので、紫式部が菅原家の訓読を学んだことは充分考えられる。

以上の先行研究より、『源氏物語』は「長恨歌」を、その訓点資料で確認できる訓読語の形で直接的に、或いは訓読語を言い和らげる形で引用していることがわかる。

五、「長恨歌伝」の『源氏物語』への影響

大東急記念文庫本巻十二では前述した如く「長恨歌」が散文である「長恨歌伝」に続く形で掲載されている。大東急記念文庫本は豊原奉重による訓点や書き込み注が数多く存する資料であるが、「長恨歌」と「長恨歌伝」の加点状況を比較すると、「長恨歌伝」により詳細な加点が施されており、このことから「長恨歌伝」が「長恨歌」の

内容を説明する役割を果たしていたのではないかと考えられる。つまり読み手は「長恨歌」の直前に位置し「長恨歌」よりも説明的である「長恨歌伝」を読む（学習することによってストーリーを把握した後に、韻文「長恨歌」を、物語全体の流れを楽しむかの如く読み進めたのではないかと考えられるのである。^{*17}従って当時「長恨歌」は単独で読まれたのではなく、「長恨歌伝」と「長恨歌」が一続きの作品として存在し、読み手も「長恨歌伝」を理解していたと思われる。

それでは、『源氏物語』に「長恨歌」の影響が認められるのと同じように、「長恨歌伝」の『源氏物語』への影響は認められるだろうか。

余田（一九八七）によると、『源氏物語』において「長恨歌伝」の引用は二例存ずるとしている。一例は桐壺巻冒頭近くに見られる次の例である。

(7) 上達部、上人などもあいなく目を側めつ、
(桐壺四)

これは帝の桐壺更衣への偏愛ぶりに対する公卿、殿上人の批判を述べた箇所であるが、この箇所には、楊貴妃一族を批判する「長恨歌伝」の次の箇所の影響を見ることができると言える。

(8) ① 京師、長吏、メニ(ヒ)為_レ之、カソハム(む)側_レ目。

(大東急記念文庫本巻十二 208 行)

② 京師の長吏、為之、側目。

(正宗文庫本長恨歌伝33行)

また、同じく桐壺卷「亡き人の住みか尋ね出でたりけむしるしの髪ざしならましかば」(本稿例文(1))は、「長恨歌伝」の次を含む箇所の影響があるとす^{*18}る。

(9) ① 指^{サシテ}碧^ニ衣^一女^を取^テ金^一釵^ニ鈿^一合^を

(大東急記念文庫本卷十二236行)

② 指^{サシテ}碧^ニ衣^の女^を取^{トラシメテ}金^一釵^ニ鈿^一合^を

(正宗文庫本長恨歌伝76行)

帝が自分の身を玄宗皇帝に例え、桐壺更衣を追慕する場面である。「長恨歌伝」を直接的に引用してはいないが、「金釵鈿合」を、和文脈的に言い和らげて「髪ざし」と言い換えている。

「長恨歌伝」の『源氏物語』への影響は、以上の指摘の他に、幻巻においても確認できる。

幻巻では、光源氏が亡くなった紫の上を思い、長い間四季を通じて悲しみに暮れる場面が設定されるが、この場面は、玄宗皇帝が亡くなった楊貴妃のことを想い日々を過ごす様子が描かれている。「長恨歌伝」の影響を受けていると思われる。以下に「長恨歌伝」からの引用が確認される例を挙げる。

(10) ① 毎_レ至_ル春_の之日、冬_の之夜、池_の蓮、夏_ケ開、宮_槐、秋_{落_ル}

(大東急記念文庫本卷十二 220行)

② 毎_レ至_ル春_の之日、冬_の之夜、池_の蓮、夏_ケ開、宮_槐、秋_落、

(正宗文庫本長恨歌伝 51行)

(11) いと暑きころ、涼しき方にてながめ給に、池の蓮の盛りなるを見給に、いかに多かる、などまづおぼし出でらるゝに、ほれくしくて、つくぐとおはするほどに、日も暮れにけり。日ぐらしの声はなやかなるに、御前のなでしこの夕映へをひとりのみ見給ふは、げにぞかひなかりける。

つれぐと我なきくらす夏の日をかことがましき虫の声哉 (幻二〇一)

「長恨歌伝」の「池蓮」が訓読された形「池の蓮」で『源氏物語』に引用され、さらに両書において夏を想定した場面を設定するためのキーワードとして用いられている。「長恨歌」においても玄宗皇帝が楊貴妃を思い日々を過ごす場面は設定されているが、光源氏が四季を通じ、一年に渡り悲しみに暮れるのと同様に、玄宗皇帝が「春夏秋冬」と四季を通じて悲しみに暮れている状況を明記しているのは「長恨歌伝」であり、「長恨歌」では「長恨歌伝」のような記述はない。^{*19}従ってこの例(11)は「長恨歌伝」の影響を受けて構成された箇所であると考えられる。

六、「長恨歌」と「長恨歌伝」

『源氏物語』への「長恨歌」「長恨歌伝」の影響について先行研究を含めた形で纏めてみたところ、その影響関係には、訓点資料で確認できる訓読文が大きな役割を果たしていることが確認できた。幻巻では「夕殿に螢飛んで」の如く「長恨歌」の訓読文を直接引用することによって読者に玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋や玄宗皇帝が悲しみに暮れる場面を彷彿とさせ、光源氏の悲しみを読者の胸に訴える効果を担っている。直接訓読文を記載したことは、当時、「長恨歌」は読み下されており、且つ、訓読文の一部のみを引用して全体を彷彿させる表現効果は、読者が「長恨歌」を読み下して読んでいたことを証明している。

桐壺巻には直接的引用はなかったものの、「長恨歌」のクライマックスを飾る「比翼鳥」「連理枝」を和文脈化して引用し、さらに「長恨歌伝」で読み取ることができる内容を背景として物語が展開されている箇所があることも確認できた(例文(5)(6)(8)(9))。葵巻においても訓点資料で確認できる「長恨歌」の訓読文を直接引用した箇所が存し、幻巻ではさらに「長恨歌伝」の影響が見られる箇所も存することが確認できた。

さて、「長恨歌」及び「長恨歌伝」とともに『源氏物語』に影響を与えた作品であることは確認できたが、その果たした役割を考えると、両者に相違点が認められるのではないだろうか。

「長恨歌伝」からの引用は「長恨歌」からの引用と異なり、『源氏物語』の地の文の中に、「目を側めつ」、「(例文(7)) 或いは「池の蓮の盛るなるを」(例文(11)) のように平易な文章の一部として出現する。「池の蓮」だけでは、何

気ない夏の情景をただ描いた場面であると理解されても不思議ではない表現である。しかし、この場面は光源氏が亡くなった紫の上を思い慕っている場面であり、且つ、光源氏は春夏秋冬を通して力ない日々を過ごしているその一場面である。「長恨歌伝」の(10)の例文を「池の蓮」から思い起こすことができれば、玄宗皇帝と光源氏に共通する心情や、そのような心情のまま幻巻において長く語られる光源氏について深く理解することが可能であろう。つまり「長恨歌伝」の内容を理解していると、物語の背景や玄宗皇帝と光源氏に共通する心情を思い描くことができ、より深く内容を読み取ることができるのである。「長恨歌伝」からの引用は確かに短い語句であるが、そこから引き出される物語の奥深さや登場人物の心情を理解できないと、作品のおもしろみを充分読み取ることができないであろう。

このような『源氏物語』への影響は、当時の「長恨歌」の学習形態とも関連すると思われる。渡辺(二〇〇五)では大東急記念文庫本所収「長恨歌」「長恨歌伝」の加點状況を分析し、「長恨歌伝」により詳細な加點が施されている現状から、両者は一続きで読まれた作品であり、また、散文であり「長恨歌」に前置する「長恨歌伝」によって読者はその内容を理解したのではないかとした。「長恨歌」は単独で読まれたのではなく、「長恨歌伝」とあたかも一続きの作品であるかの如く読まれていたのであろう。「長恨歌」を読む(学習する)ことは同時に「長恨歌伝」を読む(学習する)ことになるのである。従って、『源氏物語』に「長恨歌」のみならず「長恨歌伝」が引用されていることは、両者が同時に読まれ理解されていたことにも繋がり、当時の「長恨歌」の学習形態を裏付ける一つの根拠となると思われる。

七、終わりに — 漢籍「学習」と紫式部

紫式部が、父藤原為時が兄に『史記』を教授しているのを横で聞き、兄よりもその理解が速かったという話はあまりにも有名であるが、築島（一九六三）ではこのような紫式部の記述に関して「史記の訓読の法を覚えたことなのであろう」としている。しかも紫式部は『史記』だけではなく『白氏文集』も読み下し、内容を理解していたのである。中国から日本に将来された文献は、上代では中国語原音で理解することもあったと思われるが、それ以上に、日本語として読み下しながら内容を理解していたと思われる。従来の学令に定められた漢籍の学習は、平安時代になり時代が変化したとともに衰え、同時に学習環境も変化し、貴族の間では自由な家庭内教育が行われるようになったことは前述した。このような状況は紫式部自身にも大きな影響を与える結果となった。つまり紫式部は、本来大学寮で学ぶべき内容を、家庭に居ながらにして会得することができたのである。

『白氏文集』は、平安時代に貴族に詩文の模範として愛好されたが、これも平安時代の自由な学習環境が背景になければ学習対象とはならなかったと思われる。『白氏文集』は大部であり、当時の貴族がすべてを学習したか否かは確かではない。現存する訓点資料は、巻第三、第四の「新楽符」が数多く伝存しており、同時に「長恨歌」のような悲恋の物語も愛好された。このことは、現在でも「長恨歌」が『白氏文集』とは別に単独で読まれていることから明らかであろう。

「長恨歌」のみならず『白氏文集』は『源氏物語』に大きな影響を与えていることは周知の事実である。紫式部

は『史記』『白氏文集』などの漢籍を読み下す形で読み込み習得していたのである。築島（一九六三）では、「恐らく紫式部自筆の原本では、訓読語的要素をも他の一般の和文と同じく、平かなで書き下したのであらう。しかしこの際、作者の意識の中には「この単語、この文脈は、漢文訓読調である」といふ自覚があったことと思ふ」としている。紫式部は「長恨歌伝」と「長恨歌」の両者を読み、物語への効果的な引用を考慮している。引用することによつて特殊な表現効果を示すものであることも自覚していた。「長恨歌」とともに「長恨歌伝」を読み手が理解していることを前提として物語を構成したのである。

「長恨歌」及び「長恨歌伝」と『源氏物語』の影響関係を考察することは、表現効果や文章構成が明らかになるのみならず、当時の学習形態の一部を考察することに繋がることとなる。当時漢籍がどのように学習されていたかを考察する際の、一つの有効な方法であると思われる。

註

- * 1 桃（一九八三）参照。
- * 2 金子（一九四三）によると「古来其の最も顕著な特質の一として、大半が輸入的性質を帯びていることが認められ（中略）国勢そのものの差異が著しかった中国を、其の比隣として控えていた立場から、漢字渡来以後の日本文学はもとより、文化の全般にわたって、明治の開国に至るまで、彼国の文化とは、何としても切離すことが出来ない影響関係が存していたのである。」とある。
- * 3 金子（一九四三）によると「外来文化に対する生成発展的民族精神力の特殊な働きかけ（中略）は、これをまず性質的に考察して、（一）撰取する主体の健全性、（二）撰取醇化並に組織力の逞しさ、（三）撰取の対象に対する寛大性と批判的精神という三面から考察することが便利化と思う」とある。
- * 4 築島（一九六三）第六章「仮名文学と漢文訓読」参照。
- * 5 桃（一九八三）参照。なお、大学寮で学習するテキスト及び注釈書は、令に規定されている。唐の制度に倣ったもので、その学習法も定められた注に従い暗誦を事とする方法であった。
- * 6 小林（一九六七）参照。
- * 7 寛喜三年（一二三二）書写本。豊原奉重が嘉禎二年（一二三六）と建長四年（一二五二）の校合。
- * 8 「長恨歌伝」は陳鴻作。内容は玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を綴った散文で「長恨歌」を敷衍している。
- * 9 「長恨歌伝」「長恨歌」については太田（一九九七）第三章、二（一）「長恨歌」「長恨歌伝」の本文―附『長恨歌鎌倉写本』の二種の翻印―第五章、七「長恨歌序」の成立、新間（一九九三）参照。
- * 10 白井・八重樫（一九八一）によると、正宗文庫本はもともと『白氏文集』に中の一部としてではなく「長恨歌伝」「長恨歌序」「長恨歌」から成る独立した一巻として伝えられ、書写は正安二年五月二日。書写した人物については人名記載を欠き不明であるが、奥書には中院三位有房卿本によって書写したものであること、本奥書には菅宗本を以て書写したものであることが明示されており、素性の確かな伝本であるとしている。他に旧鈔本として三條西公正氏蔵「長恨歌」正安二年（一二三〇）が存するが「長恨歌伝」と「長恨歌序」の大部分を欠いている。
- * 11

- *12 新聞（一九九三）参照。白居易が親友元稹宛に書いた「与元九書」は元和十年（八一五）の作であり、弘仁九年はその三年後である。
- *13 築島（一九六三）「第六章 仮名文学と漢文訓読」参照。その中で、「文体論的な見地からすると、平安時代に於て、一方の極点に存在するのが訓読語であり、他の極点に存在するのが和文である」とし、仮名文学作品は作品ごとに個性があるが、「訓読語は、訓読者の「個性」を見出すことは殆ど出来ない」としている。
- *14 築島（一九六三）第六章第二節「源氏物語と漢文訓読」
- *15 『源氏物語』の「霜の花し白し」の「しろし」は、御物本では「しげし」とあり、原漢文の「重」も「シゲシ」と訓ずることはできるが「シロシ」は無理であるとしている。
- *16 築島（一九六三）では、(6)の例は他に夕顔巻「長生殿のふるきためしはゆゝしくて、はねをかはさむとはひきかへて、みろくのをかねまたふ」、また、須磨巻「たつかなき雲井にひとりねをぞなくつばさならべしともを恋つゝ」において引用されているとする。
- *17 渡辺（二〇〇五）参照。
- *18 『河海抄』において指摘されている。
- *19 「長恨歌」（大東急記念文庫本283行）に「春風桃李花開日秋雨梧桐葉落時」とある。

*使用テキスト及び所在表記について

源氏物語

…『新日本古典文学大系 源氏物語一』（岩波書店、一九九三）
『新日本古典文学大系 源氏物語四』（岩波書店、一九九六）

※所在は巻名と頁数で表記した。

大東急記念文庫本…『金沢文庫本白氏文集（一）』（勉誠社、一九八三）

※所在は巻数と行数で表記した。

正宗文庫本

…『ノートルダム清心女子大学古典叢書第三期2 正宗敦夫文庫本長恨歌』（福武書店、一九八一）

※所在は行数で表記した。

〔「長恨歌」「長恨歌伝」翻刻文 凡例〕

- 一、音合符は「|」、訓合符は「|」で示した。
- 一、音読符は右傍に「|」で示した。
- 一、ヲコト点は、平仮名で記載した。
- 一、仮名点は、カタカナで記載した。
- 一、読点は「、」、句点は「。」で示した。
- 一、雁点は「レ」で示し、数字による返点は左傍に数字を記載することによって示した。
- 一、本稿の翻刻文では、声点及び書込み注の記載を省略した。
- 一、ヲコト点と仮名点が重複するときは、ヲコト点を（ ）内に平仮名で示した。

*参考文献

- 太田次男（一九九七）『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』（勉誠社）
- 金子彦二郎（一九四三）『平安時代文学と白氏文集』（培風館）
- 新聞一美（一九九三）「白居易の長恨歌―日本における受容に関連して―」（『白居易研究講座第二卷 白居易の文学と人生Ⅱ』、勉誠社）
- 藤井貞和（一九九四）「源氏物語を中心に」（『白居易研究講座第四卷 日本における受容（散文篇）』、勉誠社）
- 小林芳規（一九六七）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会）
- 小林芳規（一九八一）「正宗敦夫文庫本長恨歌正安二年写本の訓点について」（『ノートルダム清心女子大学古典叢書 第三期2 正宗敦夫文庫本長恨歌』、福武書店）

- 小林芳規（一九九四）「訓点資料より観た白詩受容」（『白居易研究講座第五卷 白詩受容を繞る諸問題』、勉誠社）
白井たつ子・八重樫直比古（一九八一）「正宗敦夫文庫本『長恨歌』解題」（『ノートルダム清心女子大学古典叢書第
三期2 正宗敦夫文庫本長恨歌』、福武書店）
築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』（東京大学出版会）
桃裕行（一九八三）『上代学制の研究』（吉川弘文館、一九四七初版）
余田充（一九八七）『長恨歌伝』の受容覚書―「雲海沈沈」の周辺―（『源氏物語の内と外』、風間書房）
渡辺さゆり（二〇〇五）「訓点資料として見た『長恨歌伝』『長恨歌』の訓読に関する一考察―金沢文庫本『白氏文集』
卷十二所収の場合」（『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』、汲古書院）